

## 2分30秒の時間と光を受け止める

白井晴幸の「Panorama」シリーズに、中村橋駅周辺で撮影された写真が新たに加わった。練馬区立美術館の「身体で感じる緑とアート」展を機に制作されたもので、今回の個展に出品されている。もっとも白井作品は場所の固有性を際立たせることに主眼をおいているわけではないので、中村橋を撮ったとはいえ、上野や新宿を撮影地とする同シリーズの他作品と比べても、明らかな差異は直接的には読み取れない。

中村橋駅の1日あたりの平均乗降客数は38,455人<sup>1</sup>。首都圏では各段に多い数字ではないが、通勤・通学時間や帰宅時間となれば多くの人々で混雑する日常がある。近代都市の成立以降、駅と街、そこに集う人々の姿は芸術家たちにとっては格好の主題となり、優れた作品の源泉となってきた。写真や映像も例外ではない。1921年のニューヨーク・マンハッタンを記録した2人の写真家、ポール・ストランドとチャールズ・シーラーによる短編映画「マンハッタ」もその一つだ。幾何学的形態の都市を舞台とするこのドキュメンタリー作品は、接岸したフェリーから通勤客らが大挙下船するシーンに始まり、後半部では「街の人々が絶え間なく行き交う場所で、長い一日が過ぎていく」というホイットマンの詩から抜粋した中間字幕が入り、人々が闊歩する様子が生き生きと写し撮られている。

それから100年後に制作された白井の「Panorama」シリーズは、都市と人へのフォーカスという点では同様ながら、異彩を放っている。極端に細長い形状の画面を横断する彩り豊かなストライプと、一部の人物像の歪んだイメージ、そして一定方向に線的に流れていく人々。すべては、白井がこの作品を自家製のスリットカメラを三脚に固定し撮影したことから生まれた。ここでは主題よりも、カメラによる造形的探求へと関心が向けられている。デジタルアートのようなストライプは、撮影場所の看板や植栽、照明などから派生していて、まるで撮影地のカラーチャートのようにあり、人物像のデフォルメは、フィルムの回転方向に沿わない動きをした際に偶発的に「出現」する。プリント上の人々が記号化され、決まった方向にのみ配されているのもそうした特製カメラのなせる技なのだが、何やら多様性が否定され、一つの主張に流されがちな昨今の社会を暗示するかのようでもあり、不穏さを感じさせずにはおかない。

中村橋の撮影にあたり、白井は24枚撮りの35ミリフィルムを使い、1ショットでおおよそ2分30秒程度かけて露光している。つまり、この作品にはフィルム1本分の時間の流れと、その間に放たれた光が記録されているのである。プリント上に定着しているのは、「マンハッタ」に顕著な都市の躍動ではなく、不可思議な都市空間であり、写真でしか見ることができない世界を現出させている。

今回の展覧会では、「Panorama」に写り込んだ人物像をAIと3Dプリンターを介して3次元化した立体像も出品されている。写真を超えた新しい写真表現への白井の試みは、より大胆に展開されていくことだろう。期待を込めて見守りたいと思う。

伊東 正伸（いとう・まさのぶ）／練馬区立美術館 館長

<sup>1</sup> 西武鉄道 Web サイト「2024年度駅別乗降人員（1日平均）」より